

東海散士（柴四朗）の蔵書

——明治初期経済学導入史の一駒——

上野格

一、はじめに

東海散士（柴四朗）は、明治の政治小説『佳人之奇遇』全十六巻、明治十八年—三十年、の著者として知られている。筆者がこの作者に関心を持ったのは、この小説の第一巻にアイアランド論が十七頁にわたって展開されているからである。ここには、「愛蘭慘状ノ図」と題する挿絵も附してあり、そこには、アイアランドの農村に特有の Thatched house と、英兵がそこから掠奪し、また農婦達に暴行を働いている様子が描かれている。

わが国では、戦後よりも戦前、特に明治・大正期に、多くのアイアランド研究が出されているが、それでも明治十八年というのは、かなり早い方である。しかも、序文によれば、これは、作者がアメリカ留学中に書いたものであるから、実際には、十六年頃のものということになり、日本人のアイアランド論としては、最初期のものに属する。

東海散士（柴四朗）の蔵書

時期の前後はともかく、その扱っている内容は、明らかに、当時の日本では最新の知識である。

アイアランドの紹介は、小説中のヒロインの一人たるアイアランドの女性紅蓮によって語られている。（従つて我国とか、我といった表現はアイアランドのことである。）

まず、イングランドによるアイアランドの併合——ウイリアム三世あたりのことらしい——から説き始め、英蘇相謀スコットランドつて「我国ノ繁盛ヲ嫉ミ我富強ヲ忌ミ苛法虐制到ラサル所ナク我工業ヲ窘メ我製造ヲ蹙メ我貿易ヲ害シ我結会ヲ防ケ我教法ノ自由ヲ奪ヒ我出版ノ自由ヲ禁セリ」（二十九頁）と、悪名高い異教徒刑罰法によるプロテスタント・ネイションの形成過程が描かれる。これにより「良民ノ田畝」を掠奪した「地主（多ク英ノ貴族）」は「苛徴ヲ務メ」る。やがて、「今ヲ距ル」僅ニ数十載愛蘭ノ志士奮テ英政立法ノ羈絆ヲ脱シ独立保護ノ政策ヲ施行セシニ当テヤ工業振起シ士風再ヒ盛ニ四海中興ノ美群生来蘇ノ望ヲ懐ケリ」（三十頁）と、十八世紀末のグラタシオン議会前後の様子が描かれ、「再ヒ英国ノ虐政ニ窘メラレ國權憲法ノ自由ヲ殺カレ」た一八〇一年の合併と、それによるアイアランド経済の疲弊が紹介される。やがて「我民其弊ニ堪ヘス餓死スル者八十万ヲ超ユルニ至レリ」と、アイアランド特有の大飢饉が、イギリスの苛酷な植民地政策によるものであることが説かれ、しかも、「怪哉対岸ノ英民傍觀救ハサルノミナラス却テ欣然喜色を顯シテ曰ク愛國ノ窮厄ハ人民過多ノ致ス所ナリ禍災荐ニ至リ生民死亡相続キ然ル後以テ富強ヲ謀ルヘシ」と、対岸のイギリス人の全く同情ないし連帯意識のないこと、また、マルサス流の人口理論でアイアランドの貧困が説明され、人口を減ずれば経済の繁栄も可能になると説かれていた様子などが描きだされる。移民が多いのは、この「邪説」にまどわされたためだとも述べている。後に、大島貞益も、マルサス人口論の紹介を行なう際、東海散士と全く同じ観点から、アイアランドの貧困につ

いてのマルサスの解説と解決策＝移民とを鋭く批判している。しかし東海散士の説は、大島より十数年早く世に出ているのである。

こうして、アイアランドの実状から、当時の国際社会において、イギリスが如何におそろしい相手であるか、自由貿易が如何に国を誤まるものであるか、が結論として出される。

「蓋シ英人ノ外交政略タル談笑ノ間ニ劍ヲ含ミ杯酒ノ中ニ鳩ヲ灑キ狼レルヲ山羊ノ如ク貪ルヲ豺狼ノ如シ親ム可カラサルナリ若シ一タヒ彼四海兄弟自由交通ノ甘言ニ欺カレ彼ト自由ニ貿易シ彼干渉ヲ招クトキハ其邦国（土耳其、印度、埃及、諸邦）ハ漸次ニ生齒減シ国力疲レ國ニ独立ノ名称アルモ独立ノ実力ヲ欠キ年年歳歳貿易鈞ヲ失ヒ金宝ヲ輸出スル名ハ入貢ニ非スト雖モ実ハ国民ノ膏血ヲ絞テ以テ英國ニ貢スルニ異ナラサルナリ然ルニ世ニ空理ニ迷ヒ英人ノ術中ニ陥テ之ヲ睨ラサル者少カラス真ニ浩歎ニ堪ヘサルナリ誰カ謂フ英皇ハ仁慈恤愛ナリト今英女皇ノ即位以來英領印度人民ノ飢死セル者五百万」（三十一頁～三十二頁）

以上の度々の引用で明らかのように、美女紅蓮の展開するアイアランド論は、その殆どが経済問題である。イギリスのアイアランドその他の各植民地に対する苛酷な政治・経済諸政策、押しつけられた自由貿易政策のまたらす後進国の経済的破産。東海散士は、アイアランドを説明することで、自由貿易論を批判し、日本の対外政策についてイギリスその他列強の脅威を説き、また、特に貿易政策について、保護貿易政策をとるべきことを主張しているのである。

政治小説とはいえ、この簡潔な叙述の裏には、かなりの歴史的智識と、経済理論の習得とが感じられる。また当時のわが国では入手不可能な資料が、その叙述の裏にはひそんでいる。東海散士はどのような書物を利用し、

どのような条件の下で、これらを学んだのであろうか。これが、小説を知って後に、筆者の中に湧いてきた疑問であった。

幸い、いくつかの偶然も重なって、今年、東海散士がアメリカ留学中入手し利用した書物の殆どが、福島県会津若松市の若松市立会津図書館に寄贈されていることを知りえた。この寄贈図書のリストは、まだ作られていないといつてよい。³⁾ 筆者は現地に赴く機会を得、寄贈の経過、図書の状態などをごく一部であるが調査し得た。さきの筆者の疑問を解くための、これは唯一の道である。時間的制約から、限られた範囲に留めざるをえなかったが、寄贈書のリストも作成し得た。本来なら、全部の調査が完了してから活字にすべきであるが、諸事情からして、近々には調査を完了する時間的余裕を見出し得ぬため、差当り、ここに、現在までに判明した分についてだけ、記させて頂くことにした。

筆者がアイアランドを訪れる機会を、十年前に与えて下さったのは、当時の学部長、内田直作教授であった。教授の古稀をお祝いする記念号に、わが国で最も早い時期にアイアランドを論じた人物について書くことが出来るのは、望外の幸せである。

- (1) 『佳人之奇遇』にアイアランドが大きく扱われていることをご教示下さったのは、本学の三藤正教授であった。筆者が明治期の日本でのアイアランド研究に関心を持つ契機にもなったという二重の意味で、こゝで、改めて御礼申上げたい。

- (2) 拙稿「日本におけるアイアランド学の歴史」『思想』（一九七五年十一月）を参照されたい。なお、経済学導入との関係、特に大島貞益については、「戦前のわが国におけるアイアランド史研究文献について（一）」成城大学『経済研究』四

十九号（昭和五十年三月）で、一部抜けている。

(3) 若松市立会津図書館の方々の好意で、筆者は、同図書館の書庫に机をもちこんで作業することが出来た。こゝに改めて御礼申上げたい。寄贈図書のリストについては後述。なお、東海散士の蔵書が、福島県内の図書館に寄贈されていると知らせて下さったのは甲南大学の杉原四郎教授であった。度々のご教示に全くのところどう御礼を申上げてよいかわからぬ程である。

二、東海散士（柴四朗）の生涯

東海散士の生涯については、柳田泉⁽¹⁾、平泉澄⁽²⁾両氏の研究があり、また、東海散士の実弟柴五郎の遺書『ある明治人の記録』⁽³⁾にも記されている。

会津図書館所蔵の『諸士系譜』三二一によると、東海散士（柴四朗）は、柴佐多蔵繁吉（文化九甲年三月十日誕生、明治十五年九月六日没）、妻フジ（戊辰八月二十三日殉難、五十才）の第八子、四男に生れており、四朗（茂四郎）と命名されている。なお、兄弟姉妹は十一名、男子五名、女子六名で、うち女子二名（三女志ゆん、五女いよ）が夭折と記されている。五郎の『遺書』によれば、父は会津藩士、二百八十石の御物頭（隊長）格役黒紐という身分であった。この身分は、藩士の十一階級中第三位の階級で、藩中かなり重い身分であったという。

四朗は嘉永五（一八五二）年十二月に、安房の国富津の会津陣屋で生れた。父佐多蔵がそこに出張していたのである。藩校日新館に学び、病身であったが、文才はその頃から芽生えていたという。

藩主容保が京都守護職になると、父、兄に続いて四朗も京に上り、慶応四年の鳥羽伏見の戦に出陣する。十六

歳であつた。帰藩後、会津に亡命中の沼間慎次郎（守一、後に嚶鳴社をおこし、立憲改進黨結成に参加する）の塾でフランス語を学び、会津藩留学生として、海外に赴く機会を与えられたが、不幸にも、病のため出発出来なかつた。間もなく、薩長軍の会津討伐が始まり、四朗も白虎隊士として参戦する。但し、熱病のため歩行もままならぬ程であつたため、白虎隊の最後の出陣には参加できず、城中に留まり、白虎隊士の生残りとなつた。会津でのこうした生残りの人々には、生涯、一種の負い目がついて回る。故郷の人々にも、必ずしも快くは迎えられない（典型的な例には、飯盛山で自刃して果せず、通りかゝつた婦人に助けられた白虎隊士飯沼氏の場合がある。同氏の証言で、白虎隊の悲劇が明らかになつたのではあるが、同氏自身は長く郷里にいられなかつた）。柴四朗が、後述するような足跡を残しながら、常に、一步退いた立場を自ら選んだのにも、この少年の日の負い目が作用しているように、筆者には思える。

悲劇は、柴家にもあつた。当主佐多藏、長男太一郎、次男謙介、三男五三郎、四男四朗と、五人の男性が出陣した後、残つた女性達、祖母つね八十一歳、母フジ五十歳、太一郎妻とく二十歳、四女そい（鳥羽伏見で戦死した土屋敦治の妻）十九歳、六女さつ七歳の五人は、籠城して足手まといになることをさけるため、自宅で自害して果てた。戊辰八月二十三日殉難、と『諸士系譜』には記されている。同日、木村兵庫に嫁した長女かよも、重傷のため自刃した夫に殉じて、自害している。五郎の追憶では、七歳の妹さつまでも、常に短刀をたずさえており、激しい音声が聞えると、とっさに鞆をはらつて自害の身構えをしたという。

全員自刃した女性達とは逆に、参戦した男性達は、次男謙介が戦死したのを除けば、全員、傷こそ負つてはいたが、生き残つた。九歳の五男五郎も、山荘に栗拾いに出されていて、無事だつた。これは、柴家の血を絶やさ

ぬための母の配慮であった。『佳人之奇遇』には、このあたりの状況が、悲痛に語られている。生かされた五郎の錯乱した様子は、五郎自身の『遺書』に詳しい。これは、五郎の内に深い傷となって残り、薩長へのうらみと
なって重く沈澱する。後年、五郎は陸軍に進み、「賊軍」会津の出身でありながら、陸軍大將從二位勲一等功二
級にまで出世する。しかし、退役し、八十歳を過ぎて後も、なお、次のように記すのである。

「血涙の辞。いくたびか筆とれども、胸塞がり涙さきだちて綴るにたえず、むなしく年を過して齡すでに八十
路を越えたり。……時移りて薩長の狼藉者も、いまは苔むす墓石のもとに眠りてすでに久し。恨みても甲斐なき
繰言なれど、ああ、いまは恨むにあらず、怒るにあらず、ただ口惜しきことかぎりなく、心を悟道に託すこと能
わざるなり。」⁽⁴⁾

五郎はまた、大久保利通の暗殺についても、西郷、大久保は会津を血祭りにあげた元兇であって、彼らの非業
の最後は、専横、暴走の結果であり、「当然の帰結なりと断じて喜べり」⁽⁵⁾（傍点筆者）と記している。五郎は敗戦
の年の十二月十三日、八十七歳で自決した。敗戦の責任をとって自決した陸海將軍の数の少いことは、わが国の
現代史上、不愉快な「謎」の一つとってよいが、八十七歳の老將軍の自決は一つの痛ましい謎である。彼は日
清、日露の戦役に参加した。特に、この両戦役の間におこった義和団事件では、北京籠城軍の指揮官として、国
際的にも勇名をはせた。また、中国通として、多くの中国人にしたわれ、日支事変等については、既に退役して
いたが、非常に批判的であった。その彼が、何故、敗戦の責を負うかの如き最期をとげねばならなかったのか。
謎を解く鍵は、彼が、生涯に二度敗戦を経験した（会津の落城と八月十五日）日本で唯一の陸軍大將というところ
にあるのであろう。

ところで、四朗は、他の会津藩士とともに、捕虜として江戸の收容所に入れられ、やがて、会津藩が下北半島の不毛の地斗南に流されるのに従って、同地に赴く。会津藩はこの「流刑」の地でなお英語学校を設け、四朗はそこで学び、更に、横浜でイギリス人の書生になり、また、通訳をするなど、非常な苦勞を重ねる。幸い、横浜税関長柳谷謙太郎の書生として、明治八年から十年までをすごし、この頃に、当時としてはかなりの学問的蓄積が出来たようである。やがて、西南戦争がおこり、四朗も、病をおして、他の会津藩士と共に、「芋征伐」⁽⁶⁾に参加する。この参戦が機縁となって、谷干城の知遇を得、また、岩崎家の出資を得て、アメリカ留学が実現する。明治十二（一八七九）年、二十七歳のときであった。

彼はサンフランシスコにまず到着き、そこで、Pacific Business College に通じ、翌明治十三（一八八〇）年十二月十七日、Diploma を得る。さらに、ハーバードとペンシルヴァニアの両大学に学び、明治十七（一八八四）年十二月、ペンシルヴァニア大学から、Bachelor of Finance を受ける。満年令三十三歳になったばかりの時である。大体正規の期間で卒業している。戦いと飢えに明けくれた少年時代をすごしたにも拘らず、語学力は、日本で既にかなりついていたものと見える。

帰国は明治十八（一八八五）年初頭であった。当時の日本は欧化主義万能のいわゆる鹿鳴館時代であり、西欧列強の東洋侵略の危険に、誰も気附いていないかの如き風潮であった。四朗は、こうした状況を見て、憂国の書を、一般の人々の受入れやすい形で出すことにした。それが『佳人之奇遇』である。既に滞米中に書いてあった、と本人は記している。西南戦争の際も四朗は戦況を各新聞に記しており、また在米中は、アメリカおよび日本の新聞雑誌に投稿もしていたということであって、突然あらわれた著述家ではなかったのであるが、大方の日本人

からは、当然のことながら、慧星の出現のごとく迎えられ、以後第十六巻まで、特に前半は、熱狂的に読まれ、論じられた。経済の学徒が、小説家としてデビューしたのである。第一巻には谷干城の序、第二巻には朝鮮独立党の金玉均の跋、第三巻には後藤象次郎の序、その他、鳥尾小弥太、杉浦重剛、三浦梧楼、犬養木堂など各界名士の序文や跋が、多くはその人自身の書でのせられており、四朗が留学前既にかなり広汎な、当時の「名士」と知己になっていたことが伺われる。ただし、その人々が、多く、在野の日本主義、保護主義の立場の人々であることは、四朗の立場をよく示している。帰国早々、彼は、犬養たちと日本経済会を組織し、わが国最初の内閣に谷干城が入閣し農商務大臣に就任するとその秘書官になり、谷干城の案内役として、谷の欧州視察に随行する（明治十九年）。『佳人之奇遇』では、第十巻の巻末に、「海南古狂將軍」という名で谷が登場し、外遊するから一諸に行こう、と作中の散士をさそっている。その後主人公は將軍と各地を旅するのである（小説でも）。

帰国後、谷の名声とともに四朗の名もあがり、政界の名士となり、後藤象次郎らの大同団結運動にも招かれ、「大阪毎日」の刊行、陸羯南の「日本」の社友、さらには、明治二十五年以来、会津選出（のちに若松選出）の代議士を大正期まで数期つとめた。日清戦争後に三浦梧楼中将が朝鮮に赴任すると、乞われてそれに加わり、閔妃殺害事件に関係ありと見られて逮捕され、広島島の獄につながれる（『佳人之奇遇』第十六巻は、広島島の獄につながれた散士の夢枕に金玉均らがあらわれて、上海で殺された次第などを語り、驚いておきた散士が、暗黒の獄中で、外を巡視する警邏の靴音と劍の響を聞くところで終っている）。

無罪釈放された四朗は、後に、日本ではじめての政党内閣、隈板内閣（明治三十一年六月～十月）の成立に際して、大石正巳農商務大臣の下で次官をつとめる。この時、大石正巳の秘書官をつとめたのが、日本で最初のアイ

東海散士(柴四朗)の蔵書

アランド問題に関する単行書『愛蘭慘状経世偉略』国士館、明治二十五年、を著した対馬健之助である。対馬は後に大阪毎日新聞に入り、同社の経営にあたる。また、『愛蘭革命史』二松堂、大正十二年、の著者下田将美は、対馬が経営にあたっていた時に、大阪毎日の特派員としてロンドンに赴任していた。柴四朗、対馬健之助、下田将美とアイアランド問題についての当時の日本の代表的な事情通が、政治と新聞の双方で深くかかわりあっているのは、注目に値する。

四朗はこの後、憲政党分裂後も同党に留まり、山県有朋の軍事費増加、増税に反対して運動をおこし、また、清国視察を行なうなどのことがあったが、次第に政治より離れ、大正四年の大隈内閣で外務参政官になったのを最後に引退し、大正十一(一九二〇)年九月、七十歳で亡くなった。

著書には、『佳人之奇遇』のほか、『東洋美人ノ歎』明治九年、『東洋之佳人』明治二十一年、『河野磐州伝』明治二十一年、『埃及近世史』明治二十二年、『日露戦争、羽川六郎』明治三十六年などの小説と、『東京毎日』、『朝野』、『大阪毎日』、『東海経済新報』、『経世評論』などの新聞雑誌への論稿がある。⁶⁾

- (1) 柳田泉編『明治政治小説集(三)』、明治文学全集6、筑摩書房、昭和四十二年。
- (2) 柴四朗原著、平泉澄解説『解説佳人之奇遇』、時事通信社、昭和四十五年。
- (3) 石光真人編著『ある明治人の記録、会津人柴五郎の遺書』、中公新書、昭和四十六年。
- (4) 石光真人編著、同右、六頁。
- (5) 石光真人編著、同右、一一一頁。
- (6) 柴五郎は当時陸軍幼年学校生徒であった。明治十年二月二十日の日記に彼はこう記す、「真偽未だ確かならざれども

芋征代仰せ出されたりと聞く、めでたしめでたし」、石光真人編著、同右、一一五頁。

(7) 卒業証書は、二枚とも、会津図書館に保管されてある。寄贈主は、筒に、世田谷区烏山町五七五、柴四朗、嫡子守明妻か弥子、と記されている。なお、平泉澄解説『解説佳人之奇遇』には、卒業証書の写真二葉がのせてある。残念なことに、この写真では、大字以外は全然読めない。

(8) 以上の生涯および著述については、柳田泉編の前掲書「解題」によるところが多い。但し、一々は断らなかつたが、筆者の調査による若干の訂正および追加もある。

三、東海散士（柴四朗）の寄贈図書

福島県会津若松市の若松市立会津図書館は、明治三十七年二月十一日に開館している。『若松市立会津図書館一覽』明治四十三年二月十日、によると、図書館設立の経過は次のようであった。

明治三十三年五月十日、「皇太子殿下御結婚の大典」を期に、会津図書館共立会が作られ、山川健次郎、柴四朗、今泉六郎ら会津出身の有力者がこれに協力し、名を連ねる。

会津では、会津漆園会という主に旧藩士を中心とする物産会が、それまで八年間に蓄積した基金を全部図書館設立の費用に提供する。図書館の建物は明治三十五年十月に竣功し、市に寄附された。

図書については、地元および在京の人々の寄贈本が、基礎をなした。『一覽』には多数の寄贈者名が印刷されており、寄贈冊数も記されている。筆頭は柴四朗であった。寄贈冊数は七九〇冊である。今泉六郎の二四七冊とというのがそれにつぐ冊数であるが、大方は、数冊である。また、洋書として分類されているものも、実は同志社

で使った英語の教科書であったりして、質的にも、甚だ変化に富んでいる。しかし、筆者は、この、数冊ずつを持ちより（例えば、四朗の兄五三郎は七冊、第五郎は二冊、山川健次郎は二十一冊と記されている）、使い古しの教科書まで並べて、図書館を開館した彼らの熱意に、深く打たれた。薄暗い書庫の中で、ほこりを払ってそれらの古びた書物を取り出す度に、会津戦争敗北以来の彼らのうめきと、それをバネにして、必死で這い上った彼らの気迫が、伝わってくるのである（但し、残念なことに、洋書はあまり利用された形跡がない）。

寄贈図書目録は、和書と洋書に分けて作られている。洋書目録は、題名等が適当に和訳され、一応の分類をされて、薄い一冊の和綴りの冊子にまとめられている。筆で、タテ書きされており、寄贈者の氏名は記されていない。館員の一人の手で、最近、そのうちの柴四朗の寄贈本について、鉛筆書きで「柴氏」と記入されたのであるが、忙しい仕事の合間をぬって自発的に行なわれたものであるため、筆者が現物と照合した結果では、かなりの脱落が発見された。題名等の和訳も、かなり古いものであるため、もとの書名も、筆者名も、リストからは推測不可能なものが少くない。

幸い、書物の中扉には、すべて、例えば「明治三十六年四月 日 柴四朗君寄贈」という具合に、寄贈者の氏名と寄贈年月が記入されている。なお、四朗の寄贈図書のうち「洋書」は四百冊前後らしい。残りは和書または漢書であろう。第一節にも記したように、この全部を調べるのは、かなり先になりそうである。また「生涯」の節の最後に記したように、明治三十六年（十一月）以降四朗は書物を著していない。会津図書館に彼が書物を寄贈したのは、同年四月である。彼がどれ程の書物を所蔵していたかは不明であるが、少くとも主なものは、すべてこの時に寄贈してしまったのではあるまいか。没後卒業免状まで寄贈されていながら、この時に改めて書物が寄

贈られたという記録は、まだ見つかっていない。これも、四朗が、寄贈するに足る書物は、すべて明治三十六年に贈ってしまったことを物語るのかもしれない。五十歳をすぎた東海散士には、何か、書物を離れ筆を折る事情が生じたのかも知れない。ちなみに、彼が結婚したのは明治四十一年、五十七歳のときであったという。

柴田四朗寄贈図書 (邦書)

図書番号

1. Liddon, H. P., The divinity of Our Lord and Saviour Jesus Christ, London, 1884.
2. H. W. S., The Christian's secret of a happy life, London, 1875.
3. Evans, Thomas, A concise account of the Religious Society of Friends, commonly called Quakers, Philadelphia, 1880.
4. Smith, William, (ed.), Dictionary of the Bible comprising its antiquities, geography, biography, and natural history, New York, 1884.
5. Clark, Dougan, The offices of the Holy Spirit, Philadelphia, 1880.
6. Whewell, William, The elements of morality, including polity, 2 vols. New York, 1874.
7. Bonar, Horatius, How shall I go to God? and other readings, New York, 1883.
8. M'Ilvaine, Charles Pettit, The evidences of Christianity in their external or historical division, exhibited in a course of lectures, New York, 1882.
9. Atwater, Lyman H., Manual of elementary logic, Philadelphia, 1867.

10. Holy Bible.
14. Reed, Alonzo, A work on English grammar and composition, New York, 1880.
15. Jenkins, O. L., The student's handbook of British and American literature, New York, 1876.
18. Lounsbury, T. R., History of the English language, New York, 1879.
19. Hugo, Victor, Ninety-three, New York, 1874.
20. Scott, Walter, Ivanhoe, New York.
21. Mackenzie, Egypt and the Egyptian question, London, 1883.
22. Malortie, Baron de, Egypt, native rulers and foreign interference, London, 1883.
23. Cosson, E. A. de, Days and nights of service with Sir Gerald Graham's field force at Suakin, London, 1886.
24. Pitman, Emma Raymond, Central Africa, Japan and Fiji; a story of missionary enterprise, trials and triumphs, London, 1882.
25. Crawford, Oswald, Portugal old and new, London, 1882.
26. Wallace, Mackenzie, D., Russia, London, 1877.
27. Duganne, A. J. H., Governments of the world; their history and structure, New York, 1882.
29. Balzani, Ugo, Early chroniclers of Europe, Italy, (Early chroniclers of Italy), London, 1883.
30. Webster. Wentworth, Spain, London, 1882.

31. Speer, William, *The oldest and the newest Empire, China and the United States*, San Francisco, 1870.
32. Johnston, Alexander, *History of American politics*, London, 1883.
33. Scott, James George, *Burma, as it was, as it is, and as it will be*, London, 1886.
34. Gibbon / Smith, William, *The student's Gibbon*, London, 1856.
35. Grote, George, *Seven letters concerning the politics of Switzerland, pending the outbreak of the civil war in 1847*, London, 1876.
36. Huhn, A. von, *The struggle of the Bulgarians for national independence under Prince Alexander*, London, 1886.
37. Keay, J. Seymour, *Spoiling the Egyptians, a tale of Shame, told from the British Blue Books*, New York, 1882.
38. Guizot, M., *General history of civilization in Europe*, New York, 1876.
39. Michell, Thomas, *History of the Scottish expedition to Norway in 1612*, London, 1886.
40. Sharpe, Samuel, *The history of Egypt; from the earliest times till the conquest by the Arabs*, A. D. 640, 2 vols., London, 1870.
41. Forbes, C. J. F. S., *British Burma and its people; being sketches of native manners, customs, and religion*, London, 1878.

42. Samuelson, James, Roumania past and present, London, 1882.
43. Morley, John, The life of Richard Cobden, Boston, 1881.
44. Elder, William, A memoir of Henry C. Carey, read before the Historical Society of Pennsylvania, Philadelphia, January 5, 1880.
45. Clay, Henry, The life and speeches of Henry Clay, 2 vols., New York, 1843.
46. Braithwaite, Joseph Bervan, Memoirs of Joseph John Gurney; with selections from his journal and correspondence, 2 vols. - complete in one - Philadelphia, 1854.
47. Morley, John, Voltaire, New York, 1872.
48. Symonds, J. A., Sir Philip Sidney, (English men of letters), New York, 1887.
49. Schmucker, Samuel M., The life and times of Alexander Hamilton, Philadelphia, 1856.
50. Dwight, Henry O., Turkish life in war time, New York, 1881.
52. Straus, Oscar S., The origin of republican form of government in the United States of America, London, 1887.
53. Carlyle, Thomas, The life of Friedrich Schiller, comprehending an examination of his works, London, 1888.
55. Rawlinson, George, The origin of nations in two parts on early civilizations, on ethnic affinities, etc., New York, 1881.

73. Murray's Handbook for travellers in Turkey in Asia including Constantinople, London, 1878.
74. (K. Baedeker,) Southern Germany and Austria, including Hungary and Transylvania, handbook for travellers, Leipsic, 1883.
75. Appleton's European guide book, English speaking travellers, Pt. 2, New York, 1884.
76. Baedeker's Central Italy and Rome, Leipsic, 1886.
77. Baedeker's Northern Italy, Leipsic, 1886.
78. Baedeker's Northern Germany, Leipsic, 1886.
79. Forbles, S. Russell, Rambles in Naples, an archaeological and historical guide to the museums, galleries, villas, churches, and antiquities of Naples and its environs, London, 1886.
80. Murray's Hand-book Greece including the Ionian Islands, Continental Greece, the Peloponnese, the Islands of the Aegean, Crete, Albania, Thessaly, & Macedonia; and a detailed description of Athens, Pt. 1, 2, London, 1884.
81. Hare, Augustus J. C., Walks in Rome, New York,
82. Minchin, James George Cotton, The growth of freedom in the Balkan Peninsula, notes of a traveller in Montenegro, Bosnia, Servia, Bulgaria, and Greece, with historical and descriptive sketches of the people, London, 1886.
83. Bates, Henry Walter, The naturalist on the River Amazons, London, 1884.

84. (K. Baedeker,) London and its environs, including excursions to Brighton, the Isle of Wight, etc., London, 1885.
85. Walker, Eastern life and scenery with excursions in Asia Minor, Mytilene, Crete, and Roumania, London, 1886.
87. Rand McNally & Co's Pocket atlas of the world, New York, 1887.
90. A fellow of the Carpathian Society, "Magyarland," being the narrative of our travels through the highlands and lowlands of Hungary, London, 1881.
91. Otté, E. C., Denmark and Iceland, London, 1881.
92. Kay, David, Austria-Hungary, London, 1880.
93. Bird, Isabella L., Unbeaten tracks in Japan, an account of travels in the interior, including visits to the aborigines of Yedo and the shrine of Nikkô, London, 1885.
96. Sergeant, Lewis, New Greece, London, 1878.
97. Warm corners in Egypt, by "One who was in them." London, 1886.
99. Pictures of Hungarian life, London, 1869.
100. (Baedeker,) Egypt, handbook for travellers, Pt. 1: Lower Egypt, with Fayûm and the Peninsula of Sinai, London, 1885.
101. Whitaker, Joseph, An almanack for the year of Our Lord, London, 1887.

102. Bluntschli, J. K., *The theory of the state*, Oxford, 1885.
103. Hazell's *Annual cyclopaedia*, ed. by E. D. Price, London, 1887.
104. Parsons, Theophilus, *Laws of business for all the states of the union, and the Dominion of Canada*, Hartford, 1880.
105. Nicolson, A., *A sketch of the German Constitution and of the events in Germany from 1815 to 1871*, London, 1875.
106. Andrews, Loracl Ward, *Manual of the Constitution of the United States*, New York, 1874.
107. Creasy, E. S., *The rise and progress of the English Constitution*, New York, 1875.
108. Amos, Sheldon, *The science of law*, New York, 1874.
109. Lockwood, Ingersoll, 1,000 legal don'ts. *The lawyer's occupation gone. A legal remembrancer, instructor and adviser for those who have no time to read big books*, New York, 1887.
110. Woodhull, Victoria C., *The origin tendencies and principles of government; or, A review of the rise and fall of nations from early historic time to the present*, New York, 1871.
111. Clark, Charles C. P., *The commonwealth reconstructed*.
112. Gibson, A. M., *A political crime, history of the great fraud*, New York, 1885.
113. Mill, John Stuart, *Considerations on representative government*, New York, 1869.
114. Bagehot, Walter, *Physics and politics, or thoughts on the application of the principles of*

- “Natural selection” and “Inheritance” to political society, New York, 1877.
115. Mason, David H., A short tariff history of the United States from the earliest to the present time, Pt. 1 : 1783-89, Chicago, 1884.
116. Fonblanque and Holdsworth, How we are governed ; or, The crown, the senate, and the bench. A handbook of the constitution, government, laws, and power of Great Britain, revised by Alex C. Ewald, London, 1868.
117. Spencer, Herbert, Illustrations of universal progress ; a series of discussion, New York, 1877,
118. Spencer, Herbert, Political institutions ; being part V of the Principles of sociology, New York, 1882.
119. Martin, Frederick, The statesman's year-book, statistical and historical annual of the states of the civilised world for the year 1879, London, 1879.
120.for the year 1882, London, 1882.
121. Keltie, J. Scott, The statesman's year-book, statistical and historical annual of the states of the civilised world for the year 1886, London, 1886.
122.for the year 1887, London, 1887.
123.for the year 1895, London, 1895.
124. Ham, Charles H., Manual training the solution of social and industrial problems, New York,

1886.

125. Bowen, Francis, *The principles of political economy applied to the condition, the resources, and the institutions of the American people*, Boston, 1856.
126. McCulloch, J. R., *The works of David Ricardo, a notice of the life and writings of the author*, New edition, London, 1881.
127. Sumner, William G., *A history of American currency with chapters on The English Bank Restriction and Austrian Paper Money*, in the "the Bullion Report," New York, 1874.
128. Bolles, Albert S., *Chapters in political economy*, New York, 1874.
129. Chalmers, Thomas, *On political economy in connexion with the moral states and moral prospects of society*, Columbus, Ohio, 1833.
130. Kelley, William D., *Speeches, addresses and letters on industrial and financial questions, to which is added an introduction, together with copious notes and an index*, Philadelphia, 1872.
131. Harvey, James, *Paper money, the money of civilization; an issue by the state, and a legal tender in payment of taxes*, London, 1877.
132. Spencer, Herbert, *Essays; moral, political and aesthetic*, New York, 1868.
133. Bagehot, Walter, *Lombert Street; a description of the money market*, New York, 1873.
134. Fawcett, Henry, *Free trade and protection, an inquiry into the causes which have retarded the*

- general adoption of free trade since its introduction into England, London, 1878.
135. Gronlund, Laurence, The cooperative commonwealth in its outlines; an exposition of modern socialism, Boston, 1884.
136. Carey, M., Essays on banking, Philadelphia, 1816.
137. Purdy, William, London banking life, papers on trade and finance, New York, 1876.
138. Hawley, Frederick B., Capital and population; a study of the economic effects of their relations to each other, New York, 1882.
139. Spaulding, M. C., Handbook of statistics of the United States, New York, 1877.
140. Sturtevant, Julian M., Economies or the science of wealth, New York, 1877.
141. Kirkman, Marshall M., Railway expenditures; their extent, object and economy, 2 vols, Chicago, 1880.
142. Carey, H. C., The past, the present, and the future, Philadelphia, 1848.
143. Mill, James, Elements of political economy, 3rd ed., London, 1844.
144. Perry, Arthur Latham, Elements of political economy, New York, 1873.
145. Conversations on political economy, by the author of "Conversations on chymistry," Philadelphia, 1817.
146. Bastiat, M. Frederic, Essays on political economy, Chicago, 1869.

147. Rogers, J. E. Thorold, Social economy, New York, 1872.
148. Cossa, Luigi, Guide to the study of political economy, London, 1880.
149. Laveleye, Émile de, The elements of political economy, New York, 1884.
150. Bastiat, Frederick, Essays on political economy, New York, 1877.
151. Gregory, John M., A new political economy, New York, 1882.
152. Bascom, John, Political economy; designed as a text-book for colleges, New York, 1860.
153. Thompson, Robert Ellis, Protection to home industry, four lectures delivered in Harvard University, January 1885, New York, 1886.
154. Simonds, John Cameron, & MacEinnis, John T., The story of manual labor in all land and ages; its past condition, present progress, and hope for the future, Chicago, 1886.
155. Bart, E. Sullivan, Protection to native industry, London, 1870.
156. Stebbins, Giles B., The American protectionist's manual, protection to home industry, Detroit, 1883.
157. Elder, Cyrus, Man and labor, New York, 1886.
158. About, Edmond, Handbook of social economy; or the worker's A. B. C., New York, 1873.
159. Play, F. Le, The organization of labor in accordance with custom and the law of the Decalogue, Philadelphia, 1872.

160. Spencer, Herbert, *The study of sociology*, New York, 1876.
161. Taussig, F. W., *Protection to young industries as applied in the United States, A study in economic history*, Cambridge, Mass., 1883.
162. Spencer, Herbert, *A system of synthetic philosophy*, Vol. 1: First principles, New York, 1883.
163. *Third annual report of the Bureau of Statistics of Labor of the State of New York*, for the year 1885, Albany, 1886.
164. Barnard, Charles, *Co-operation as a business*, New York, 1881.
165. Mongredien, Augustus, *History of the free-trade movement in England*, New York, 1881.
169. Carey, H. C., *Slave trade, domestic and foreign*, Philadelphia, 1872.
170. Cairnes, J. E., *The slave power; its character, career, and probable designs*, New York, 1862.
171. Hutchinson, John Hely, *The commercial restraints of Ireland*, Dublin, 1882.
172. Phillips, William, *Propositions concerning protection and free trade*, Boston, 1850.
173. Stebbins, Giles B., *Progress from poverty*, review and criticism of Henry George's *Progress and Poverty*, and *Protection or Free Trade*, Chicago, 1887.
215. Scanlan, John F., "Why Ireland is poor." *A tariff and free-trade lesson for the American people*, 4th ed., Chicago, 1880.

四、むすびにかえて

前節に記した寄贈書の構成をみると、大別して四種類のものが認められる。その第一はキリスト教関係のものである。これは、「異教徒」四朗にキリスト教を教えようとするアメリカ人の「善意」による贈り物である場合が多いらしく、扉に、贈り主の名が、献辞と共に記されている場合が多い。例えば²には Mr. Shiro Shiba, with kind regards of Mary Morris, Iberbrook, Philadelphia, 11. 22. 1882. ³ ⁴ ⁵ To my friend Shiro Shiba, as a Scholar and a Lover of Truth and Knowledge from E. W. Syle, Philadelphia, 22 Nov. 1884. とある。四朗が熱心な勉強家で、また、おそらくは論客であつて、学友および教師に親しまれ尊敬されていた様子が、こうした献辞から伺える。若干の鉛筆による印などはあるが、また、中国の仏教の僧侶などについての英文の書きこみなどもあるが、四朗自身はそれほど熱心にはこうしたキリスト教関係の図書を読んでいるようである。

これと対称的なのが、最も多い比率を占める世界各国の地理および歴史を扱った書物である。ベデカーの旅行案内も含めて、アメリカ、カナダ、南米（アマゾン）、ビルマ、エジプト、トルコ、ギリシャ、バルカン、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、イタリア、ドイツ、オーストリア、デンマーク、ロシア、スイス、スペイン、ポルトガル、イギリス、スコットランド、アイアランド、日本、つまり、中近東からアジア、ヨーロッパ、アメリカと殆どの地域の地理、歴史、社会についての書物が揃っている。エジプトの独立運動を扱った書物を四朗は著しているが、おそらくその材料に利用したらしく、エジプト関係の書物数点には、彼独得の鉛筆による印が多

東海散士（柴四朗）の蔵書

く記されている。スペイン関係のものに印があるのは、『佳人之奇遇』のヒロインで散士の恋人役のスペインの美女幽蘭の舞台に利用した跡であろう。注目されるのは、アイアランド史関係の二冊（171, 215）であって、どちらも、アイアランドが自由貿易政策のため貧困にあえいでいる様を詳説したものである。後者、即ちスキヤンランの書物には、Mr. Shiro Shiba with the regards of his friend & teacher Heylre Baird, philad. Feb. 28/51. とある。この書物は Mathew Carey, Henry Charles Carey, Henry Carey Baird と三人のアイリッシュ・アメリカンに献呈されている。ケアリー父子は、勿論、保護貿易主義の経済学者として著名な二人である。彼らはフィラデルフィアを中心に活動していた。この三人はアメリカにおけるアイアランド解放運動の輝ける指導者達であり、また、一族であった。四朗にこの書物を贈った先生の姓が同じであるところから、彼もまたその一族なのであらうと筆者は推測している。『佳人之奇遇』でアイアランドが出てくる背景には、こうした交友関係もあったのである。四朗の保護貿易主義がケアリーの流れをくむものであるのも明白である。

四朗の蔵書には、また、国家論、憲法論などの一群がある。これにはかなりチェックなどがある。102、ヤドイツ憲法に関する105、英国憲法に関する107、などがかなりよく読まれており、ハミルトンの伝記49では、true liberty was to be found neither in despotism, nor in the extremes of democracy, but in moderate governments alone; for too much democracy leads to popular despotism. という部分に下線がひいてあったりして、四朗の立場がよく示されている。

肝心の経済学関係については、あまり目立った特長はない。勿論、書物の種類から十分伺えるように、彼の主な学習は実学と保護主義であって、ケアリー、バステリア、啓蒙家フォーセットであり、ハーバート・スペンサ

1、バジヨットであった。四朗自身も『佳人之奇遇』の序で、実用の学をおさめた旨記しているが、まさにその通りであって、経済理論にはあまり関心が向かなかつたらしい。何故か、スミスの『国富論』は見当らず、リードはマカロック版であるが、第八章から先は頁も切つてない(もつとも、こゝまで読んでいれば理論上は十二分という見方も出来るが)。J・ミルの『要綱』も第三節利潤から先は頁が切れてない。J・S・ミルは『代議政体論』があるのみで、『原理』はない。マルサスが一冊もないのは不思議である。こうした第一級の古典の欠落にくらべて、おそらく教科書として用いられた経済理論書は数も多く、読んだあとも多く印されている。125、には、ミス、チャーターイズムのあたりに印があり、141の鉄道論などには大分読んだあとがある。151には、価格変動を扱った章に、「若シ或经济学家ノ論ノ如ク物価ト貨価ト傍テ離レサルモノナレバ物価減スル時ハ貨価随テ落ル故ニ世間 Value の浮沈ノ為ニ損得ナカルヘシ」と書込んである。そのほか、自由貿易の欠陥を指摘する部分などにも同感の印がある。

再三弁解してきたように、まだ調査は途中であり、書きこみその他についても検討は今後の課題に残してある。近く、完成したリストと、四朗の学習の跡の再現を発表出来ればと願っている。